



モダリティ要件「話し手」「発話時」からみる日中語における判断のモダリティ形式の違い

著者	王 其莉
雑誌名	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要
巻	4
ページ	165-175
発行年	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123099

【論文】

モダリティ要件「話し手」「発話時」からみる 日中語における判断のモダリティ形式の違い

王 其莉^{1)*}

1) 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育センター

本稿は、モダリティ要件「話し手」「発話時」という視点から、日中語における判断のモダリティ形式の違いを考察するものである。具体的には、「なければならない」と“必須”、「はずだ」と“应该”、「かもしれない」と“可能”“也许”、「ようだ」「らしい」と“好像”を考察対象とし、モダリティ要件「話し手」「発話時」がそれぞれの対応する形式の意味用法の違いを見出すのに有効であることを示した。すなわち、日本語の疑似モダリティ形式はモダリティ要件「発話時」だけではなく、「話し手」を欠く場合にも使え、中国語の疑似モダリティ形式はモダリティ要件「発話時」を欠く場合には使えるが、「話し手」を欠く場合には使えないことがある。また、「かもしれない」と“可能”“也许”を除いて、中国語のモダリティ形式は日本語のモダリティ形式に比べてモダリティ要件「話し手」に対する要求度が高く、モダリティ形式としての真正性が高いことも分かった。

1. 研究背景と問題提起

仁田(1991:18)では、「モダリティ」を「現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握の仕方、および、それらについての話し手の発話・伝達的態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現である」と定義しており、また、「話し手の立場からした」「発話時」といった要件を欠いていくに従って、当該形式は真正モダリティ・典型的なモダリティの表現形式から疑似モダリティ形式にずれ込んでいくことも指摘している。これに従い、以下の推量を表す「だろう」と“也许”、感嘆を表す「ね」と“啊”は、常に話し手の発話時現在の心的態度を表すため、これらの形式は常にモダリティ要件「話し手」「発話時」を満たす真正モダリティ形式であると思われる。

(1) 明日は晴れるだろう。¹⁾

(1') 明天也许天晴。

(2) この部屋、暑いね。(『現代日本語文法4』2003:3)

(2') 这个房间真热啊。

これに対し、以下の形式は、モダリティ要件を欠く場合においても使える疑似モダリティ形式であると思われる。(3)の「学生が校則を守る」ことは学校の校則、あるいは誰が判断してもそうなる世間の一般道理

であるため、話し手という個人の立場からの判断として考えにくい。従って、ここの「なければならない」と“必須”は「話し手」というモダリティ要件を満たしていない。また(4)の「午後は雨が降る」ことは話し手の判断ではあるが、話し手の発話時現在の判断ではないと思われる。対照的に(6)の「午後は雨が降る」ことは、空模様を見てすぐその場で下した判断なので、話し手の発話時現在の判断であると考えられるが、(4)では人が布団を干そうとしている行為を見て、そこから「午後は雨が降る」と判断することはないので、話し手は発話時以前に獲得した情報あるいは判断したことを述べているのである。従って、ここの「かもしれない」と“可能”は「発話時」というモダリティ要件を満たしていない。

(3) 学生は校則を守らなければならない。

(3') 学生必须遵守学校规定。

(4) [布団を干そうとしている人に] 午後は雨が降るかもしれないよ。

(4') 下午可能要下雨。

しかし、疑似モダリティ形式は、真正モダリティを表す用法も持っている。以下の例は、話し手の発話時現在の心的態度を表しているもので、ここの「なければならない」と“必須”、「かもしれない」と“可能”は、

*) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 qili.wang.e4@tohoku.ac.jp

モダリティ要件「発話時」「話し手」の両方を満たしており、真正モダリティを表していると思われる。

(5) A: 今日虫歯の痛みがひどいんだ。

B: それは大変だね。すぐ歯医者に行かなければならないよ。

(5') A: 今天虫牙疼得很厉害。

B: 那可太糟糕了。必须马上去医院。

(6) [空模様を見て] 午後は雨が降るかもしれない。

(6') 下午可能要下雨。

以上の(1)～(6), (1')～(6')をまとめて考えると、真正モダリティ形式と疑似モダリティ形式を区別するのに「話し手」「発話時」という二つのモダリティ要件が有効であることは、日本語と中国語の両言語において共通して言えることである。

また、仁田(1991:53)は、こういった要件を欠いていくにつれて、「その形式のモダリティ形式としての疑似性が増していく」とし、「要件を欠いていく度合いは、その形式の表すモダリティの真正性・疑似性の度合いである」としている。これに従って考えると、(1)(1')(2)(2')のような真正モダリティ形式はその表すモダリティの真正性が一番高く、疑似モダリティ形式は、(5)(5')(6)(6')のようなモダリティ要件「話し手」「発話時」の両方を満たしている場合のモダリティの真正性が、(3)(3')(4)(4')のようなモダリティ要件「話し手」「発話時」の一方しか満たしていない場合より高いということが分かる。この点も日中両言語が共通していることである。

では、両言語に跨って、対訳上対応する日本語と中国語のモダリティ形式の表す真正性・疑似性を比べたらどうなるだろうか。同じだろうか。本稿は、これを問題意識とし考察を進める。

2. 本稿の目的と考察対象

本稿の目的は、「話し手」「発話時」という二つのモダリティ要件が日中語の対応形式の意味用法の違いを見出すのに有効な視点であることと、日本語のモダリティ形式より中国語のモダリティ形式のほうが表すモダリティの真正性が高いことを示すのにある。

考察対象は、モダリティの中核である判断のモダリティを表す形式とする。具体的には、判断のモダリティ

を評価判断のモダリティと真偽判断のモダリティに二分し、評価判断のモダリティを表す「なければならない」と「必須」、真偽判断のモダリティを表す「はずだ」と「应该」、「かもしれない」と「可能」「也许」、「ようだ」「らしい」と「好像」を考察する²⁾。

なお、これらの形式は、「也许」を除いて、すべて疑似モダリティ形式である。それは、真正モダリティ形式は常にモダリティ要件「話し手」「発話時」を満たしているので、「モダリティ要件からみる」という本稿の視点から考察を行っても違いを見出せないからである。「也许」に関しては、意味上疑似モダリティ形式「かもしれない」と対応し、「可能」との違いもモダリティ要件から見出せるため、考察対象に入れたのである。

3. 考察

この節ではまず、それぞれの対応する日中語の形式の意味用法の違いを見出すのにモダリティ要件「話し手」「発話時」が有効であることを示す。その次にそれによって、日本語より中国語の判断のモダリティ形式(疑似モダリティ形式)のほうが表す真正性がより高いことを導く。

分析に先立ち、「話し手」と「発話時」の二要件の関係をここでことわっておく。「発話時」は「話し手」に包摂される。「話し手」の判断である場合にかぎり、さらにそれが話し手の「発話時」の判断かどうかで分けられるのである。従って、この二要件を満たすかどうかによって、以下の三つの場合が考えられる。

	話し手	発話時
I	×	—
II	○	×
III	○	○

3.1 「なければならない」と「必須」

「なければならない」と「必須」は評価判断のモダリティ形式として、当該事態Qの実現が必然的であるという評価判断を表す点で共通している。また1節でも示したように、両形式とも疑似モダリティ形式であるが、真正モダリティを表すこともできる。では、両形式のモダリティ形式としての真正性・疑似性は同じ

だろうか。

まず、モダリティ要件「話し手」によって、当該事態Qを「話し手以外の人の評価判断」(Ⅰ)と「話し手の評価判断」に分け、また、「話し手の評価判断」をモダリティ要件「発話時」によって、「話し手の発話時以前の評価判断」(Ⅱ)と「話し手の発話時の評価判断」(Ⅲ)に分ける。(7)(7')では、話し手はQを規則として述べており、Qは話し手による評価判断ではないので、Ⅰを表す。(8)(8')(9)(9')では、話し手はQの実現が必然的であるという評価判断を理由として挙げているので、その評価判断は発話時に下したのではなく、発話時以前に下したものであることが分かる。従って、Ⅱの場合であると思われる。また、(10)(10')のQは話し手が発話時現在その場で下した評価判断なので、Ⅲの場合である。

(7) 転入者は一週間以内に届けを出さなければなら
ない。

(7') 入居者必須在一周之内提交登记表。

(8) 明日は歯医者に行かなければならないから、早
めに退社して行くつもりだ。

(8') 明天必須去医院，所以打算提前下班去。

(9) A：昨日はどうして早退したの？

B：昨日は歯医者に行かなければならなかつ
たから、早めに退社したんだ。

(9') A：昨天怎么提前下班了呢？

B：昨天必須去医院，所以提前下了班。

(10) A：今日は虫歯の痛みがひどいんだ。

B：それは大変だね。すぐ歯医者に行かなけ
ればならないよ。

(10') A：今天虫牙疼得很厉害。

B：那可太糟糕了。必須马上去医院。

以上の例文のすべてにおいて、「なければならない」と“必須”が対応しており、一見モダリティ要件「話し手」「発話時」が両形式の比較において機能しないと思われるがちである。しかし以下のように、当該事態Qの実現が伴い得ない文脈を付けると、両形式に違いが浮かび上がる。

(11) 規則では，転入者は一週間以内に届けを出さ
なければならないけど，今回特別に許可をも
らって，二週間以内に出せばいいと言われた。

(11') 按规定，入居者必須在一周之内提交登记表。

但这次得到特殊许可，说两周之内交出就行。

(12) 明日は歯医者に行かなければならなかつたけ
ど，急に重要な仕事が入っちゃって，行けな
くなった。

(12') ?明天必須去医院，但突然有了项很重要的工
作要做，不能去了。

(13) 昨日は歯医者に行かなければならなかつたけ
ど，仕事に追われていたので，行かなかった。

(13') ?昨天必須去医院，但由于工作太忙，没能去上。

(14) 今日になって虫歯がひどく痛くなった。やは
り昨日のうちに歯医者に行かなければならな
かつた。

(14') *今天虫牙疼得厉害了。昨天还是必須去医院。

(11)(11')は(7)(7')と同じくⅠを表し、(12)(12')
(13)(13')は(8)(8')(9)(9')と同じくⅡを表し、
(14)(14')は(10)(10')と同じくⅢを表す。具体的に見ると、当該事態Qの実現が伴い得ない場合では、Qを話し手以外の人の判断として述べる時に、両形式とも使えるが、発話時以前の話し手の評価判断として述べる時に、“必須”が不自然になり、発話時現在の話し手の評価判断として述べる時に“必須”は完全に不適格になる。つまり、さらに「Qの実現が伴い得るかどうか」という視点を加えて考察すると両形式に違いが生じた。しかし、それはQをまずⅠⅡⅢに分けて、そのうえで「Qの実現が伴い得るかどうか」という視点を加えたので、ⅠⅡⅢに分けたモダリティ要件「話し手」「発話時」も両形式の違いを見出す有効な視点であると言えよう。

さて、「なければならない」と“必須”のモダリティ真正性について考えよう。(12')～(14')を見ると、“必須”は話し手の評価判断を表す場合、必ず事態Qの実現を要求し、Qの実現を伴い得ない文脈には使えない。Qの実現を伴い得ない文脈は「Qの実現が必然的である」という話し手の判断内容に反し、“必須”は、この場合に使えないのは、「話し手」の立場からしたという要件を満たすうえに、文脈的には話し手の判断内容まで保証されなければならないからである。すなわち、“必須”は「話し手」、さらにその背後にある「判断内容に反しない」という要件まで満たすことが要求

され、「なければならない」より「話し手」に対する要求度が高いと言えるのではないか。言い換えれば、“必須”は「なければならない」よりモダリティ形式としての真正性が高いということであろう。

また、以下の場合でも「なければならない」と“必須”に違いが浮かび出てくる。これらは地の文であるが、当該事態Qを話し手の発話時の評価判断（書き手が文章を書く時の評価判断）として考えられる。しかし、Qの内実を見ると、事物発展の成り行きを表し、誰がいつ判断してもそうなることであり、話し手の個人の判断ではないと思われる。従って、完全に話し手個人の発話時の評価判断を表す(10)(10')に比べて、以下の例文の場合は「話し手」「発話時」のモダリティ要件を満たしている度合いが相対的に低いと考えることができる。それゆえ、モダリティ形式としての真正性が低い「なければならない」はこれらの例文の「モダリティ要件を満たしている度合いが相対的に低い」という点に合致して使えるのであり、“必須”は不適格である。

(15) 問題になった米は、食糧管理法に基づき、生産から末端の販売にいたるまで、食糧庁によってきびしく管理されていた。その結果日本人は国際価格の8倍という高い米を食べなくてはならない。(日本経済の飛躍的な発展)

大米曾是一个热点问题，日本粮食厅根据《粮食管理法》，从生产到最终零售，对大米加以严格管理。其结果使日本人不得不食用相当于国际价格8倍的高价大米。(日本经济的腾飞)

(15') ……*其结果使日本人必须食用相当于国际价格8倍的高价大米。

(16) さてこうした非キリスト教の哲学者たちは、カトリックの立場からすれば、信仰がないのだから地獄に墮ちなければならない。しかし心優しい人ならば、こうした知恵を愛した人々を入坑地獄インフェルノの底に落とすにはしのびないだろう。(マッテオ・リッチ伝)

基于天主教的立场，这些非基督教的哲学家们由于不信仰上帝，则要堕入地狱。不过如果是心地善良的人，则不忍让这些热爱智慧的人们落入火坑地狱。(利玛窦传)

(16') *基于天主教的立场，这些非基督教的哲学家们由于不信仰上帝，则必须堕入地狱。……

(17) 私は無駄を出さないため、剣で丁寧に根を切り取り、水で洗い、皮を剥いた。火がなく、何でも生で食べねばならぬのが、私の楽園の唯一の欠点であったが、それはよく咀嚼すれば、補えると思われた。(野火)

为了避免浪费，我用刺刀把木薯的根仔细切下，用水洗净再剥皮吃。由于没有火，所以什么都得生吃，这是我的乐园的唯一缺陷。不过细嚼慢咽还可以弥补这一不足。(野火)

(17') ……*由于没有火，所以什么都必须生吃，……

3.2 「はずだ」と“应该”

「はずだ」と“应该”は真偽判断のモダリティ形式として、両方とも「根拠Pから論理的に推論して結論Qになる」という基本的な意味を表す点で共通している。では、モダリティ要件「話し手」「発話時」という視点から両形式に違いが見られるだろうか。

従来、「はずだ」には「見込み」用法と「悟り」用法という二つの用法があるとされている。それに比べて合わせて考えると、“应该”は「見込み」用法しかない。まず「見込み」用法から見てみよう。

(18) 彼はパーティが好きだから、明日のパーティには来るはずだ。

(18') 他很喜欢宴会，所以明天的宴会他应该来。

(19) [財布が見つからなくて] 鞆に入れたはずだけど、あれ？ない。

(19') 我应该放到包里了，可怎么没有呀？

(20) すみません、4時に着くはずだったけど、事故があつて、電車が遅れました。

(20') 对不起，本来应该4点到。出了交通事故，电车晚点了。

(21) 昨日は同窓会に行くはずだったけど、急用が入り、行けなかった。

(21') 昨天本应该参加同学聚会，突然有急事没去上。

(18) は、話し手は自分の持っている「彼はパーティが好きだ」という知識を根拠にして、結論が間違いなく一つ、「彼は明日のパーティには来る」と推論して

いる。また(19)は、話し手は自分の記憶を探り出して、確かに「鞆に入れた」という記憶があることを結論として出している。この二つの例文は、当該事態Qは話し手の発話時による判断である。一方、(20)では、自分が立てた計画を根拠にして「4時に着く」という結論になることは、話し手が発話時以前に判断したことである。また(21)の「同窓会に行く」ということも話し手の予定であり、発話時以前に判断したことであると考えられる。この二つの例文は、当該事態Qは話し手の発話時以前の判断である。(18')～(21')を見ると、中国語の“应该”もすべて使える。すなわち、当該事態Qが話し手の判断である場合、それが「発話時」の判断かどうかで両形式に違いが見られない。

それに対し、以下の「悟り」用法では両形式に違いが出てくる。

(22) この部屋、寒いねえ。[窓が開いているのを見つけて]寒いはずだ。窓が開いているよ。(『日本語文型辞典』2001: 647)

(22') *这个屋子好冷啊。[看到窗户开着]应该冷。窗户开着呢。

(23) A: 彼はもとプロ野球選手だって。

B: どうりで野球がうまいはずだ。

(23') A: 听说他原来是专业棒球选手。

B: *应该棒球打得这么好。

「窓が開いている」という根拠から論理的に推論すると、「寒い」という結論になり、また「もとプロ野球選手」という根拠から論理的に推論すると、「野球がうまい」という結論に至る。しかし、(22)の「寒い」と(23)の「野球がうまい」ことは、発話時点において話し手にとってすでに分かっていることである。言い換えれば、話し手は根拠Pより結論Qのほうを先に情報として持っており、結論Qは話し手の既得知識であるということである。では、(22)(23)の場合、話し手は何を判断したのだろうか。話し手はPからQが真であることを判断したのではなく、PとQが論理的な推論関係にあり、既得知識Qが論理的な帰結であることを判断したのである。

(22')(23')を見ると、“应该”は当該事態Qが既得知識である場合には使えない。既得知識は話し手による判断ではないと思われる。例えば、(22)の「寒い」

ことは話し手が直接に感じ取ったことであり、現実存在している事実である。(23)の「野球がうまい」ことは、他人から聞いた情報であり、他人の判断であると考えられる。従って、“应该”は話し手による判断でなければ使えず、「話し手」というモダリティ要件を満たさなければならない。よって、「話し手」というモダリティ要件を欠いてもいい「はずだ」に比べて、“应该”のほうは「話し手」に対する要求度が高く、モダリティ形式としての真正性が高いと言える。また、以上を見ると、「話し手」というモダリティ要件で「はずだ」と“应该”に違いがあることも言えよう。

また、(24)(25)では、「はずだ」が使えないのに対して、“应该”は使える。森田(1989: 952)では、「現状から事実を判断したり想像したりする場合は、「はずだ」の領域からはずれている」と説明している。また、森山(1995: 174)では、「はずだ」は「現場から得た情報を直接使わないという特性を持つ」と指摘しているが、その理由には触れていない。現場で獲得した情報あるいは現状から推論する時に、他の人の推論ではなく、話し手自身の推論であることがより強く表されていると考えられる。そのため、モダリティ要件「話し手」に対する要求度が高い中国語の“应该”が使えるのではないか。

(24) *これだけ待っても来ないところをみると、今日は来ないはずだ。

(24') 这么等都不来，今天应该不会来了。

(25) *なんだか体がだるい。少し熱もある。私は風邪を引いたはずだ。

(25') 觉得浑身没劲儿，还有点儿发烧。我应该是感冒了。

3.3 「かもしれない」と“可能”“也许”

日本語の可能性表現「かもしれない」に対応する中国語訳として、“可能”“也许”が挙げられる。しかし、「当該事態Qが真である」ことについて、「可能性がある」と述べるころまでは同じであるが、「可能性がある」ことをどのように述べるか、すなわち現実における客観的事実として述べるか、発話時以前における話し手の判断として述べるか、それとも発話時における話し手の判断として述べるかは、異なっている。

まず、「事態Qが真である可能性がある」ことを現実
に即した客観的な事実として述べ、すなわち話し手
による判断として述べるのではない場合、“可能”が
使えるのに対し、「かもしれない」と“也许”は使え
ない。例えば、(26)の「人類の狂牛病には多くの種
類が存在している」という事態が真である可能性があ
ることは、実験によって証明された現実世界に実在し
ている事実であり、話し手自身の考え方によるもので
はないと思われる。つまり、モダリティ要件「話し手」
を満たすかどうかによって、“可能”と「かもしれない」
“也许”の間に違いが出てくる。

(26) 实验证明“人类疯牛病”可能存在多种。(CCL
コーパス)

実験は、人類の狂牛病には多くの種類が存在
している可能性があることを証明した。

(26') *实验证明“人类疯牛病”也许存在多种。

(26'') ?実験は、人類の狂牛病には多くの種類が
存在しているかもしれないことを証明した。

次の(27)(28)は、「事態Qが真である可能性があ
る」ことを発話時以前における話し手の判断として述
べている場合である。

(27) 爸爸抚了抚我的脑袋，沉吟了一下说：“方丹，
这段时间，爸爸有很多话想对你们说，可总觉得
你们还小……现在看来，形势已经越来越紧张，
随时都可能发生一些意想不到的事情，爸爸这样问，
是希望你和小曦能有个思想准备。爸爸必须告诉你们，
我和妈妈，不，不光是我们，还有许多叔叔阿姨很可能
都要被揪走……（轮椅上的梦）

父は私の頭をなでて、しばらくだまっていた。
「方丹、最近言いたいこともたくさんあるが、
君たちはまだ小さい……見たところ、雲行き
はますます怪しい。いつ何が起こるかわから
んから、ふたりにも覚悟しておいてほしいん
だ。言うておくが、パパもママも、いや、他
の大勢のおじさん、おばさんたちも、みんな
連れて行かれるかも知れない……」（車椅子の
上の夢）

(27') ……?随时都也许发生一些意想不到的事情，
……还有许多叔叔阿姨很也许都要被揪走……

(27'') ……いつ何が起こるかもしれないから，
……

(28) [布団を干そうとしている人に] 今日は雨が降
るかもしれないよ。

今天可能要下雨。

(28') *今天也许要下雨。

まず、中国語の“可能”の例を見ると、(27)は父
親が最近考えたことを子供に話している場面である。
従って、「何が起こる」「みんな連れて行かれる」こと
が真であることについて、可能性があると判断したのは、
発話時以前であると考えられる。つまり、発話時
では、発話時以前に判断したことを述べているのであ
る。また、「かもしれない」の例を見ると、(28)は、
布団を干そうとする人に対しての発話である。空の様
子を観察して、雨が降る可能性があると判断すること
はあるが、布団を干そうとするという相手の行為を見
て、それを根拠として雨が降るかどうかについて判断
することはないように思われる。まず考えられるのは、
話し手は発話時より前に天気予報など何らかの情報に
基づいて、雨が降る可能性があると判断し、それを相
手に伝えている場合である。また、話し手は、相手が
布団を干そうとしているのを見て、そこから空の様子
を観察し、雨が降る可能性があると判断した場合も考
えられる。この場合でも、相手に伝える時に、話し手
の判断は、発話時直前ではあるが、発話時以前の判断
であると思われる。いずれにしても(28)の、雨が降
る可能性があると話し手の発話時以前における判
断なのである。以上をまとめると、(27)(28)では、
話し手は「事態Qが真である可能性がある」ことを発
話時以前における推量判断として述べていると考えら
れ、“可能”と「かもしれない」は使えるのに対し、“也
许”は使えない。“也许”で述べると、話し手の発話
時の判断を表すことになるので、不自然さが生じたり、
非文になったりする。

それに対し、「事態Qが真である可能性がある」こ
とを発話時における話し手の判断として述べている場
合、三形式とも使える。

(29) “去多久？ 什么时候回来？”她问。“可能就一
去不回了。”刘学尧做出轻松地样子耸了耸肩膀
答道。（人到中年）

「どれくらいいらっしゃるの？お帰りはいつごろ？」「多分もう帰っては来ませんよ」劉学堯は清々した、という風に肩を聳やかしていた。（人、中年に到るや）

- (30) 「という訳で」と銀之助は額へ手を当てて、「そこへ気が付いてから、瀬川君の為ることはすっかり読めるように成ました。どうも可笑しい可笑しいと思って見ていましたッけ—— そりゃあもう、辻褃の合わないようなことが沢山有ったものですから」「成程ねえ。あるいはそういうことが有るかも知れない」と言って、校長は郡視学と顔を見合せた。（破戒）

“因为这样，”银之助把手放在额头上说，“自从觉察到这个秘密之后，我才算理解了濑川兄的所作所为。起初我总觉得很不可理解。因为不合情理的地方太多了。”“原来是这样，也许有这么回事。”校长和郡督学面面相觑。（破戒）

- (31) “你看着怎么样啊？”“这怎么说呢？也许不太妙。”（金光大道）

「あんたはどう見る？」「そうだなあ、あんまり思わしくねえかもしんねえ」（輝ける道）

これらはすべて会話文である。話し手は、相手の質問を受け、当該事態Qについて真である可能性があるとして発話時に判断したのである。（27）（28）を併せて見ると、モダリティ要件「発話時」によって、“可能”「かもしれない」と“也许”の間に違いが生じる。

すなわち、“可能”はモダリティ形式としての真正性が一番低く、モダリティ要件「話し手」「発話時」に対する要求度も低く、両方を欠く場合でも使える。「かもしれない」はその次にモダリティ形式としての真正性が低く、モダリティ要件「話し手」を欠く場合では使えない。“也许”は真正モダリティ形式であり、モダリティ要件「話し手」「発話時」の両方を満たさないと使えない。言い換えれば、モダリティ要件「話し手」「発話時」という視点から三形式の違いを見出せるのであり、“也许”→「かもしれない」→“可能”の順にモダリティ形式としての真正性が低くなるのである。

また以下の（32）（33）は、「なければならない」と“必須”の（15）～（17）の場合と同じで、誰がいつ

判断を行ってもそうなることであり、話し手の独自の判断ではないと思われる。この場合、発話時の話し手の判断として述べているが、話し手独自の発話時の判断を表す（29）～（31）に比べて、「話し手」「発話時」のモダリティ要件を満たしている度合いが相対的に低いと考えることができる。従って、「かもしれない」と“也许”は使えないのである。

- (32) 但随着阶级斗争的发展，这种矛盾也就可能发展为对抗性的。苏联共产党的历史告诉我们：列宁，斯大林的正确思想和托洛茨基，布哈林等人的错误思想的矛盾，在开始的时候还没有表现为对抗的形式，但随后就发展为对抗的了。（毛泽东选集第一卷）

だが、階級闘争が発展するにつれて、この矛盾も敵対性のものに発展する可能性がある。ソ連共産党の歴史は、われわれに、レーニンやスターリンの正しい思想とトロツキーやブハーリンなどのあやまった思想との矛盾が、はじめのころはまだ敵対的な形態となっておりはしなかったが、のちには敵対的なものに発展したことを教えている。（毛沢東選集一）

- (32') ……*这种矛盾也就也许发展为对抗性的。……

- (32'') ……# この矛盾も敵対性のものに発展するかもしれない。……

- (33) 告诉妈妈：任何人都可能走错路。路不能重走，心可以回头。（人啊，人）

お母さんにはこう伝えてほしい。だれだって行く道を誤ることはある。道は歩き直すことができなくても、心はふり返ることができる。（ああ、人間よ）

- (33') ……*任何人都也许走错路。……

- (33'') ……?だれだって行く道を誤るかもしれない。…

3.4 「ようだ」「らしい」と“好像”

「ある証拠に基づいて推定を行う」という証拠性判断を表すモダリティ形式として、日本語には「ようだ」「らしい」などがあり、それと対応する中国語表現に

は“好像”が挙げられる。まず、「ようだ」と“好像”について見てみよう。

以下の(34)(35)を見ると、「ようだ」と“好像”はともに「推定」用法を持っている。

(34)「ああ、伸びたとも。もうこの頃じゃ僕とあんまり違わないようだね」(痴人の愛)

“啊，是长高了。这会儿好象和我差不多高了。”
(痴人之爱)

(35)すると玉枝は、口の中でかすかな声をたてている。人の名をよんでいるようだった。(越前竹人形)

这时，玉枝口中发出细微的声音，好像是在叫一个人的名字。(越前竹偶)

(34)を見ると、「伸びた」というのは、話し手が観察したことであり、事実同然である。この観察した事実を根拠にして、話し手は「僕とあんまり違わない」という結論を引き出した。そして、(35)の「口の中でかすかな声をたてている」ことも話し手が観察した事実であり、その声の内容や口の形などから、話し手は「人の名をよんでいる」のだと推定していると思われる。つまり、ここの当該事態は、話し手が根拠に基づき思考を働かせて頭の中で新たに構築した事態である。また(34)は会話文なので、当該事態は話し手の発話における判断なのである。(35)では過去形「ようだった」になっており、話し手の発話時以前による判断として考えられる。いずれにしても「ようだ」と“好像”が対応しており、モダリティ要件「発話時」は両形式に違いを生じさせない。

また、以下の例文のように、「ようだ」には「様態」用法があるが、“好像”にはない。

(36)女の耳の凹凸もはっきり形をつくるほど月は明るかった。深く射しこんで暈が冷たく青むようであった。(雪国)

盈盈皓月，深深地射了进来，明亮得连驹子耳朵的凹凸线条都清晰地浮现出来。铺席显得冷冰冰的，现出一片青色。(雪国1)

月亮十分明亮，连女人耳朵坑坑洼洼的地方都清晰地照出。亮光深深地射进来，铺席冰冷地显出蓝色。(雪国2)

月光朗澈，几乎连她耳朵的轮廓都凹凸分明。

一直照进屋内，把席子照得冷森，青悠悠的。(雪国3)

(36')……?铺席好像显得冷冰冰的，好像现出一片青色。

……?亮光深深地射进来，铺席好像冰冷地显出蓝色。

……?一直照进屋内，好像把席子照得冷森，青悠悠的。

(37)顔のかたちやぴょろりと細い手首なんかのせいで、レイコさんの方が直子よりやせていて小柄だという印象があったのだが、よく見てみると体つきは意外にがっしりとしているようでもあった。(ノルウェイの森)

由于脸形和手腕细弱的关系，印象中玲子要比直子瘦削。但仔细看去，身体显得意外结实。(挪威的森林)

(37')……?但仔细看去，身体好像显得意外结实。

(36)と(37)は場面を描く小説の地の文である。(36)では、明るい月が部屋に射し込んだその時の暈の様子を「冷たく青む」と描写している。「暈が冷たく青む」ことは、話し手の目に映り込んだそのままの映像である。(37)も「よく見てみると」という文脈から、「体つきは以外にがっしりとしている」ことは話し手が目で観察したことであることが分かる。つまり、ここの当該事態は、実在するとも言うべき客観世界に対する話し手の受容であり、話し手が頭の中で思考を経て新たに構築した結論ではない。このことは、中国語の、客体が内部から現れる性質の描写に用いる“显得”“显出”“现出”などに訳されていることから分かる。つまり、ここの当該事態Qが話し手の判断ではない。モダリティ要件「話し手」を満たすかどうかで「ようだ」と“好像”に違いが生じる。また“好像”は「話し手」による判断でないと使えないので、話し手の判断ではない場合にも使える「ようだ」に比べて、モダリティ形式としての真正性が高いと言えよう。

次に「らしい」と“好像”を見てみたい。まず、(38)(39)のように「らしい」と“好像”は両方とも「推定」用法がある。

(38)「能く解るのかな」と云った。兄は父の理解力が病気のために、平生よりは余程鈍っている

ように観察したらしい。(こころ)

又说：“都看得懂吗？”好象在哥哥看来，他觉得父亲生了病以后，理解力已比往常迟钝得多。

(心(2))

(39)「鹿馬へ何しに行くんです？」運転手は車をはしらせ始めると間もなくきいた。運転手にも、杏子の鹿島行きが不審に思われるらしかった。「到鹿島干什么？」汽车开动不久，司机向杏子问道。就连司机也好象对杏子的鹿岛之行感到不解。

(38)において、話し手は兄が言った「能く解るのかな」という言葉を根拠にして、「兄は父の理解力が病気のために、平生よりは余程鈍っているように観察した」と推定している。(39)において、「鹿馬へ何しに行くんです？」を根拠にして「運転手にも、杏子の鹿島行きが不審に思われる」と推定している。つまり、ここの「らしい」が述べる事態は、根拠に基づき思考を働かせた話し手の推定である。すなわち当該事態は、話し手の判断である。また(38)は現在形の「らしい」、(39)は過去形の「らしかった」となっており、(38)の当該事態Qを話し手の発話時の判断、(39)の当該事態Qを話し手の発話時以前による判断と考えることができる。いずれにしても「らしい」と“好像”が対応し、モダリティ要件「発話時」を満たすかどうかで両形式に違いが生じない。

次の(40)(41)を見ると、「らしい」には「伝聞」用法があるが、“好像”にはない。

(40)そこは村の東南へ突き出た岬の根方の、石だらけの小さな浜である。そこで焼く煙は村のほうへひろがらないので、昔からそこが焼場に使われて来たものらしい。(金閣寺)

这里是村东南山岬下濒海的一块乱石滩。据说在这儿火葬，冒的烟不会刮向村里，所以自古便被选作火葬场了。(金阁寺)

(40')……#好像在这儿火葬，冒的烟不会刮向村里，所以自古便被选作火葬场了。

(41)もっとも最近では、紙やビニールだけの家でも建つらしいから、ぶよぶよには、ぶよぶよなりの、力学的構造というものがあるのかもしれないが……(砂の女)

就在最近，听说还有用纸和塑料布造的房子呢，所以，对软不邈邈，也许有软不邈邈的力学构造吧……(砂女)

(41')#就在最近，好像还有用纸和塑料布造的房子呢，……

(40)の「そこで焼く煙は村のほうへひろがらないので、昔からそこが焼場に使われて来たもの」ということは、話し手が独自に何らかの根拠に基づき判断したことではなく、他人から聞いた話などにより直接入手した情報である。(41)の「紙やビニールだけの家でも建つ」ことも、新聞あるいは他人などから直接入手した情報であり、話し手自身がある根拠に基づき構築した事態ではない。そのため、ここの「らしい」は中国語の“据说”“听说”に訳されている。“据说”“听说”は「聞いた話では、聞くところによると……」という意味であり、当該事態には話し手自身の推定がまったく入っていない。また、(40')(41')を見ると、“据说”“听说”を“好像”に言い換えても文は成立する。しかし“好像”に換えると、話し手の推定になり、当該事態が必ず真であると断定できるまでの根拠はなく、「推定」として提示しているというニュアンスを帯びてくる。よって、“好像”には「伝聞」用法がないように思われる。つまり、モダリティ要件「話し手」は“好像”と「らしい」に違いを生じさせる。また“好像”は「話し手」の判断しか使えないので、話し手の判断ではない場合にも使える「らしい」に比べて、モダリティ形式としての真正性が高いと言える。

4. まとめ

以上、モダリティ要件「話し手」「発話時」という視点から、日中語のすべての対応形式において違いが見られた。「発話時」は「話し手」に包摂されるので、まず当該事態Qを話し手の判断ではない「話し手：×」の場合と話し手の判断である「話し手：○」の場合に分け、また「話し手：○」の場合を話し手が発話時に下した判断かどうかによって「話し手：○、発話時：×」「話し手：○、発話時：○」の二つの場合に分けることができ、次頁の表のようにまとめられる。

まず、全体的に見ると、モダリティ要件「話し手」を満たすかどうかで、日本語と中国語の形式に違いが

	「話し手」：×	「話し手」：○ 「発話時」：×	「話し手」：○ 「発話時」：○
なければならない	○	○	○
必須	○	○/△	○/×
はずだ	○	○	○
应该	×	○	○
可能	○	○	○
かもしれない	×	○	○
也许	×	×	○
ようだ	○	○	○
らしい	○	○	○
好像	×	○	○

見られることが分かる。

「なければならない」と“必須”では、モダリティ要件「話し手」という視点のうえに、「Qの実現を伴い得るかどうか」という視点を加えて両形式を考察して違いが見られるが、モダリティ要件「話し手」で両形式に違いが見られることは間違いない。具体的には、当該事態Qの実現が伴い得ない場合では、話し手の判断内容に反し、“必須”が使えない。また“必須”はさらに「発話時」によって不自然か不適格の違いが生じるが、「なければならない」と“必須”に違いを生じさせるのは基本的にモダリティ要件「話し手」であると考えられる。そして、“必須”は、「話し手」の背後にある「判断内容に反しない」という要件まで満たす必要があり、「なければならない」に比べて、モダリティ要件「話し手」に対する要求度が高いと言える。

「はずだ」と“应该”において、話し手による判断ではない既得知識の場合、「はずだ」が使える、“应该”は使えない。「話し手」というモダリティ要件で両形式に違いが見られる。また“应该”は「話し手」というモダリティ要件を満たさなければならないので、「はずだ」よりモダリティ要件「話し手」に対する要求度が高い。

“可能”「かもしれない」と“也许”において、モダリティ要件で「話し手」「発話時」で三形式に違いが見られる。真正モダリティ形式“也许”を除いて考えると、モダリティ要件「話し手」で疑似モダリティ形式の“可能”「かもしれない」に違いが見られる。

「ようだ」「らしい」と“好像”においては、“好像”は話し手の判断ではない「様態」用法と「伝聞」用法

に使えず、「ようだ」は「様態」用法、「らしい」は「伝聞」用法に使える。つまり、モダリティ要件「話し手」で三形式に違いが生じる。“好像”は話し手の判断しか使えず、「ようだ」「らしい」よりモダリティ要件「話し手」に対する要求度が高い。

また、モダリティ要件「話し手」によって日本語と中国語の形式に違いが見られるうえで、“可能”「かもしれない」と“也许”を除いて考えると、中国語のモダリティ形式は日本語のモダリティ形式よりモダリティ要件「話し手」に対する要求度が高く、モダリティ形式としての真正性が高いことも伺える。つまり、日本語と中国語の疑似モダリティ形式は真正モダリティとして使える点で共通しているのに対し、日本語の疑似モダリティ形式はモダリティ要件「発話時」だけではなく、「話し手」を欠く場合にも使え、中国語の疑似モダリティ形式はモダリティ要件「発話時」を欠く場合には使えるが、「話し手」を欠く場合には使えないことがある。中国語の疑似モダリティ形式は話し手による判断ではない用法まで派生しにくいと言えよう。

注

- 1) 本稿の例文は先行研究やコーパスから引用したもの、または作例もある。先行研究やコーパスから引用したものは出処を表記し、コーパスは『CCLコーパス』と『中日対訳コーパス』を使用する。訳文は筆者による（『中日対訳コーパス』を除く）。
- 2) これらの形式は対訳上対応関係にあることは王(2016)で詳細に考察を行っている。

例文出典

『日本語文型辞典』（中国語簡体字版）（2001）くろしお出版

『中日対訳コーパス』（2003）北京日本学研究中心

『CCLコーパス』北京大学漢語語言学研究センター

参考文献

王其莉（2016）『判断のモダリティに関する日中対照研究』
ひつじ書房

中畠孝幸（2013）「日本語と中国語の根拠性（エビデンス・
リティ）について—「らしい」「ようだ」「そうだ」
と「好像」を中心に—

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書
房

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 第8部
モダリティ』くろしお出版

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

森山卓郎（1995）「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、
副詞～Φ」『日本語類義表現の文法（上）単文編』仁
田義雄・宮島達夫編 くろしお出版

李幸禧（1991）「中日語の蓋然性判断形式について—機能
的階層構造という側面から」『日本学報』10 大阪大
学文学部日本学研究室

李幸禧（1993）「中日語のモダリティ位置と発話上の機能
について—認識・判断のモダリティ形式を中心に」『日
本学報』12 大阪大学文学部日本学研究室

